

平成 29 年度  
横浜市立高等学校  
及び  
併設型中学校  
自己評価書

横浜市立横浜商業高等学校

## <学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・商業科・スポーツマネジメント科・国際学科

2 学校長 長田 正剛 (平成30年4月1日現在 在職2年目)

### 3 学校教育目標

本校は学則に則り、後期中等教育およびビジネス教育・国際理解教育を行い、他を尊重し自立精神を持つ個を育み、将来の社会人としてビジネス社会を理解し、問題解決能力と国際的視野を持つ豊かな人間を育てることを目標とする。

#### ○商業科教育目標

生徒一人ひとりの能力に応じた個性を尊重し、経済のサービス化・グローバル化・ICTの急速な発展や地域産業の振興など起業家精神を身につけた人材の育成及び職業人としての倫理観・遵法精神などの育成への対応のため、力強く生きることができる資質を、体験的・実践的な活動を含めながら高め育てる。

##### ●重点目標

- ☆ビジネス等の実社会で役立つ将来のスペシャリストやリーダーを育成する。
- ☆地域に貢献する即戦力としての人材を育成する。
- ☆教科指導や特別活動・部活動を通して全人教育・人柄教育を行う。

#### ○スポーツマネジメント科教育目標

スポーツや健康に関する学習や実践的な活動を通して、科学的な知識・理解を深めるとともに、スポーツとそのマネジメントにかかわる能力を育てる。

##### ●重点目標

- ☆地域における生涯スポーツ振興の担い手づくりと横浜におけるスポーツの活性化に貢献する人材を育成する。
- ☆スポーツや健康分野におけるビジネスの振興発展に貢献する人材を育成する。
- ☆将来の社会的・職業的自立に向けた資格や技術を習得した人材を育成する。

#### ○国際学科教育目標

自主自立の精神を培うと共に、国際感覚、コミュニケーション能力及び問題解決の方法を身に付け、国際社会で世界の人々と共に生きる力を育てる。国際社会で共に生きるために、自己及び自国の文化を深く認識し、かつ多文化共生の姿勢をもてるよう国際感覚を育てる。

##### ●重点目標

- ☆国際社会で共に生きるために、自己及び自国の文化を深く認識し、かつ多文化共生の姿勢をもてるよう国際感覚を育てる。

- ☆異なった文化の中でも積極的にコミュニケーションできる能力を育てる。
- ☆多様化する国際社会で主体的に行動するため、自ら問題を発見し整理し解決方法を追求し続ける能力を育てる。
- ☆教科指導や特別活動・体験実践活動を通して全人教育・人柄教育を行う。

#### 4 教育方針

- 生徒の主体的な学びを支援し、「活力」「魅力」ある学校づくりを推進する。  
生徒の興味・関心・意欲の向上を目指した指導方法の工夫を行い、わかる授業に取り組み、一人ひとりの生き方を踏まえた進路指導を推進し、課題解決能力の育成を図る。
- 新たなビジネス教育（経済のサービス化・グローバル化や ICT への対応、起業家精神の育成、職業人としての倫理観）や世界の人と共に生きる力を育てる国際理解教育を推進する。
- 国際的な視野に立った先進的なビジネス教育やコミュニケーション能力を身につけた国際社会に貢献しうる人材を育成する。
- 学校評価を実施し、絶えず問題意識を持って、学校教育改革を推進する。学校評価委員会を活用し、P 計画・D 実行・C 振り返り・A 行動 のサイクルで改善を継続させる。
- 第 2 期横浜市教育振興基本計画に沿って教育改革を推進し、Y 校としての商業教育の方向性を示し、また国際学科の一層の定着を図る。学力の全体的な底上げを図り、伸びる生徒を伸ばし進路に責任を持つ。開設 15 年目を迎えた国際学科の振り返りを行い、成長を図るとともに、ビジネスシーンをリードする人材の育成を目的とした YBC（Y 校ビジネスチャレンジ）クラスの実践と検証を行う。また、開設 4 年目となったスポーツマネジメント（YSM）科のより良い教育課程の編成に向けて、引き続き取り組んでいく。

#### 5 教職員数（平成 29 年 12 月 1 日現在）

校 長	<u>1</u>	校長代理	<u>1</u>	副校長	<u>2</u>	事務長	<u>1</u>
教 諭	<u>68</u>	（男 <u>46</u> 、女 <u>22</u> ）		養護教諭	<u>2</u>		
実習助手	<u>1</u>	事務職員	<u>4</u>	技能職員	<u>3</u>		
A E T	<u>1</u>	非常勤講師	<u>17</u>	管理員	<u>7</u>		

（防災員 2 名含む）

6 生徒在籍数（平成 29 年 12 月 1 日現在）

年次（学年）	学級数	男子	女子	合計
1	7	123	153	276
2	7	112	162	274
3	7	120	154	274
合計	21	355	469	824

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		75	63	84.0%
生徒	1年	276	275	99.6%
	2年	274	270	98.5%
	3年	274	256	93.4%
	合計	824	801	97.2%
保護者		824	688	83.5%

8 自己評価実施日

教職員	平成 29 年 12 月 14 日～平成 29 年 12 月 19 日
生徒	平成 29 年 12 月 13 日～平成 29 年 12 月 21 日
保護者	平成 29 年 11 月 6 日～平成 29 年 11 月 20 日
地域	平成 30 年 3 月 22 日

9 集計・分析期間

平成 29 年 12 月 1 日～平成 30 年 4 月 27 日
-----------------------------------

10 自己評価書の公表方法・時期

学校ホームページ上で、平成 30 年 6 月以降に発表の予定。

## <自己評価>

### 1 第2期横浜市教育振興基本計画の推進状況

#### □魅力ある高校教育の推進状況

〈商業科〉

(関連アンケート番号：教職員 1、4、5、6、生徒 1、保護者 1、2、6、10)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・個性を伸ばす専門教育の推進を目指し、検定上位級取得による専門性の深化に取り組んだ。</li><li>・高大連携や産学連携による取組を積極的に行った。</li><li>・各種ビジネスコンテスト等への参加についても積極的に取り組んだ。</li><li>・専門学校2校との連携により、日商簿記検定や販売士検定合格に向けての特別講座を実施した。また、公務員志望者に対しては公務員受験講座を開設し、民間企業志望者に対しては就職マナー講座を行った。</li><li>・資格取得とともに、地域との連携を図り地域貢献し活躍できる人材を育成することをもう一つの柱として、商業の魅力と専門性をさらに高めていこうとする取組を2年生の授業「課題研究」で行った。</li><li>・また、3月に本校講堂で課題研究発表会を開催し、1年間の研究成果を1年生の前で発表した。</li><li>・地域との連携として、「総合実践」において南区内の老人クラブとの交流授業を6月と9月の2回実施した。</li><li>・専門教育の中学校・中学生およびその保護者へのPRへの取組として、学校案内やWEBページの改良を行った。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・全国商業高等学校協会1級3種目以上合格者は、43名（1級8種目合格1名、7種目2名、6種目1名、5種目7名、4種目13名、3種目19名）と28年度の38名を上回り、神奈川県内トップの合格者数を輩出した。ちなみに、28年度の内訳は1級6種目合格5名、5種目4名、4種目13名、3種目16名であった。教科全体として、授業以外での検定対策や補習を実施した成果が表れたものとする。</li><li>・国家資格であるITパスポート試験には2名、国内旅行業務取扱管理者に1名が合格した。</li><li>・日商簿記検定と販売士検定の合格者数は、現時点では結果が出ておらず集計できないが、28年度以上の成果が期待される。</li><li>・「課題研究」における調査研究の一例として、「ドンドン商店街復活計画」や、株式会社丸加と連携した「横浜のスカーフの商品化を目指すプロジェクト」がある。また、「YOKOHAMA HATSUプロジェクト」は、横浜の観光をテーマとして外国人観光客を横浜へ誘致する方策を考え実践するプロジェクトであり、株式会社JTBコーポレートセールスや東洋大学と連携して活動してきた。</li></ul>

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高大連携による取組として、横浜市立大学・関東学院大学・東洋大学と積極的に連携をとった。</li> <li>・ YBC 2年「課題研究」の授業においては、29年度は京浜急行電鉄(株)との産学連携により、同社から与えられた課題を生徒達が考察し解決策のアイデアを提示し講評をいただくという企画を行った。</li> <li>・ 同じくYBC 2年「課題研究」の授業で行ったインターンシップにおいて、8事業所に計17名を受け入れていただき、ビジネスの現場実習を通じて職業意識の向上をはかり、商業を学ぶ意義を育むことができた。</li> <li>・ 各種ビジネスコンテスト等への参加については、「総合実践」のなかで日本政策金融公庫主催の高校生ビジネスプラングランプリの応募に取り組んだ。全国から392校の応募があり、15校選ばれる学校賞を29年度も受賞した。YBC 1年「キャリアプランニング(CP)」では、マイナビ主催のビジネス甲子園において2グループが1次審査を通過した。また、YBC 3年の「総合実践」では、神奈川県生徒商業研究大会に学校代表として参加した。</li> <li>・ 老人クラブとの交流授業はお年寄りの方々に大変好評であり、また、生徒達のマナー実践の場ともなり良い体験となった。</li> <li>・ 商業科の公務員志望者36名のうち、1次試験合格者は延べ67名、最終合格者は延べ33名、実数24名と、全国の商業高校のなかでトップの成果を出すことができ、商業科生徒の進路選択の幅を拡げている。具体的な最終合格先は、衆議院事務1名、参議院事務1名、国家税務4名、国家事務2名、地方事務17名、消防2名、警察6名であった。ちなみに、他校のWebページに掲載されている公務員合格者数の例を挙げれば、浜松商19(含自衛官3)、高崎商11、新潟商10、前橋商8、伊東商4、厚木商3、宇都宮商3、栃木商3、長岡商3、川崎幸1、沼津商1であった。</li> <li>・ 専門教育の中学校・中学生およびその保護者へのPRを目的に、学校案内やWebページをより分かりやすくするとともに、随時WEBページを更新して最新の情報を発信するよう心がけたことにより、商業科の受験者が28年度より大幅に増加した。</li> </ul>
<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家庭学習の時間が取れていない生徒が多いことが課題である。</li> <li>・ 全国商業高等学校協会主催1級3種目以上合格者数は県内トップであるが、更なる成果を出すことが必要である。</li> <li>・ 「課題研究」の更なる充実を図ることが必要である。</li> </ul>

<b>改善策</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時から家庭学習の習慣を身に付けさせる。</li> <li>・入学時から資格取得を奨励し、3年間を見通して計画的に上位級取得を目標とさせ、継続して補習対策も教科全体で取り組んでいく。</li> <li>・商業科全体として「課題研究」の内容を改善し、活きた商業教育実践を積み重ね、Y校商業科の魅力を発信していく。</li> </ul>
------------	---

### 〈スポーツマネジメント科〉

(関連アンケート番号：教職員 1、4、5、6、生徒 1、保護者 1、2、6、10)

<b>取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部機関との関わりを精選し、より効果的な講演会・体験会を実施した。</li> <li>・1期生の担任を3年の進路指導担当者とし、進路指導の充実を図った。</li> <li>・会計系の授業において検定上位級合格を視野に入れた授業展開に取り組んだ。</li> </ul>
<b>成果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取り組みと成果のバランスを考え、負担過多の内容については見直しを図るとともに、必要だと思われる内容については追加した。</li> <li>・指定校推薦の合格者が28年度8名に対し、29年度は17名となった。</li> <li>・検定上位級合格を視野に入れた授業展開を行ったが、思うような成果はあげられなかった。</li> </ul>
<b>課題</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会や体験会では、生徒はじっくりと取り組むことができたようで得られたものも大きかったようである。なお、保護者も講演会や体験会に参加したいという意見があったため、保護者に事前告知するかどうかは課題である。</li> <li>・公務員希望者が多かったが、28年度に比べ合格者の比率が低かったことが課題である。</li> <li>・2年次財務会計Ⅰの授業展開で工夫を試みたが、1年次簿記で基礎の定着を図れなかったことが課題である。</li> </ul>
<b>改善策</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会や体験会の計画を早めに立てることにより、保護者が参加できる内容であるかどうかの議論も早めにする。</li> <li>・28年度も課題であった商業科と同じ時間帯に進路指導を受けることができないという点が、十分な公務員指導が行き届かなかった原因の一つと考えられることから、30年度は教育課程を変更して対応することとした。</li> <li>・専門学校の協力を得ながら、教員の基礎知識や指導力の向上を図り、生徒に提供できる授業の質を高める。</li> </ul>

## 〈国際学科〉

(関連アンケート番号：教職員 1、4、5、6、生徒 1、保護者 1、2、6、10)

取組	<ul style="list-style-type: none"><li>・他校を招いて英語で行う学生会議 Y S F (Yokohama Student Forum) は、横浜市文化観光局 MICE 振興課およびアジア開発銀行と共催で実施し、29年度のテーマ「労働」に関する事前学習会を横浜市役所の協力で実施した。</li><li>・国際学科 NEWSLETTER の発行（毎月発行）と学校ホームページで閲覧ができる Web 版を発行し、進路選択を検討している中学生と保護者を対象にした内容に組み替えて発行した。</li><li>・大学入試において、英語 4 技能の資格を採用する大学の増加に対応するために、TOEIC-IP は従来の Reading Listening に加えて Speaking を採用した。30年度からは Writing も実施する準備を進めている。</li><li>・9月に OB・OG と在校生との交流イベント「ホームカミング」を実施した。150名が参加し、卒業生との話し合いの機会をもった。</li><li>・ボランティア活動を積極的に行い、一年で延べ 100 名を超える生徒が参加した。</li></ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・本校主催の学生会議 Y S F は、横浜市の全面的なバックアップにより「職業」観がまだはっきりしていない生徒にとっては良い機会となった。労働者人口が減る中で、横浜市の今後の取組み、AI の影響、高齢化社会における介護問題や離婚率の上昇など、専門科から具体的な指摘を受けながら理解を深めた上で議論ができたことは有益だった。</li><li>・NEWSLETTER に関しては、保護者への情報発信として機能していると思われたが、学校説明会のアンケート結果から、学校の様子を知りたい旨の内容があり、29年度 Web 版を配信した。説明会に参加した多くの生徒保護者に Web 版を見ていただき評価をいただいている。</li><li>・TOEIC-IP は毎年同じ時期にこのテストを行うことで、技能レベルごとの比較や個々の生徒の成長や課題を知ることができた。TOEIC-IP は 28 年から Speaking を導入したが、その効果があったのか、英検上級合格者が増加、TOEIC 公式試験における高得点者の増加と、直接的な関係は不明だが、資格取得への意識づけにはなったのではないかと考える。</li><li>・ホームカミングでは、国際学科の行事の意味を知る職員がいなくなり、職員同士の情報交換の場面としても役にたったが、国際学科を卒業した後の進路選択に悩んでいた生徒にとっては、社会人の卒業生との交流で、何をしたいのかイメージがつかめる機会となった。今後とも続けていきたい。</li><li>・ボランティア活動は、これまで参加することに意義があると考えていたが、活動した後の振り返りをする中で、活動の意義がより具体的に見えてきたようだった。また、ボランティア証明書を発行し、活動実績として大学入試等の資料として役立てられるようにした。</li></ul>



<p><b>課 題</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Y S F の取組は生徒主体で行っているが、1・2年生の意思疎通がうまくいかずに、有益な活動準備が行えないことがあった。</li> <li>・ TOEIC-IP は4技能型にすると従来の3倍近くの料金となり、保護者の理解が必要である。</li> <li>・ 選択教科の説明は十分に行ったが、生徒によってはさらに詳細に説明する必要があったためか、締め切り直前に変更せざるを得ないことがあった。特に国際学科で設定している Skill Up Period は自学自習を主体とした時間を確保しているが、進路実現のために厳しい自己管理ができるように指導する必要がある。</li> </ul>
<p><b>改善策</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Y S F の運営面では、職員と生徒実行委員が入念な打ち合わせを行い、全生徒に正しい情報が共有できるように報告・連絡・相談のサイクルが円滑に動く会となるよう指導していきたい。</li> <li>・ 国際学科の選択教科説明会を開き、生徒が教科の内容を十分理解した上で教科を選択できるようにしたおかげで、科目の内容理解は例年以上に上がったと感じる。Skill Up Period に関して、よりきめ細かな指導が必要と感じ、目的などを丁寧に説明していきたい。</li> </ul>

## 2 教育活動の状況

### □教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2、3、生徒 1、保護者 2)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の実態等を踏まえた特色ある教育課程の編成・実施を行う。</li> <li>・生徒が主体的に選択できる選択科目を開講する。</li> <li>・多様な進路実現に向けた教育課程・教育内容の改善を図るため、教育課程の効果的運用を図る。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「希望する進路に進むために必要な科目や興味・関心を満たす科目が設定されていますか」（生徒 1）は、28年度の 82%から 85%と増加した。しかし、「本校のカリキュラム（教科・科目構成）は、お子さんの進路実現に役だっていると思いますか」（保護者 2）については、28年度、29年度とも 82%で変化がなかった。</li> <li>・29年度も 28年度に引き続き、生徒の希望に即した選択指導が出来るよう選択科目調査を 2 回実施し、生徒が自らの進路と向き合う機会をより多く設けた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・28年度同様、商業科の普通科商業科共通選択群（選択ア）の選択者の偏りが見られ、12科目中 2科目が不成立となってしまった。生徒の希望にできるだけ対応できる選択科目の開講が必要である。</li> <li>・29年度も 3 学期になってから大量の選択変更希望者が出た。原因は、生徒の積極的な進路変更によるものではあるが、生徒の進路に即した科目選択を実現するため、現在の科目設定（選択群等）、設置学年、科目の内容等の問題点を洗い出し、改善する必要がある。また、進路指導部が中心となって、教育課程を編成する必要がある。</li> <li>・商業高校として特色を出しつつ、大学入学共通テストに対応できるカリキュラムの作成、新教育課程の作成にむけて準備を始めることが 30年度の課題である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校には 4 つのカリキュラムが存在する。学校全体で選択科目の精選や選択群の見直しを進める。特にスポーツマネジメント科や国際学科については、経営会議と連携しながら、選択群の見直しを検討する。</li> <li>・生徒の希望や個々の進路に対応する選択科目の開設と進路指導との関わりを検証する。進路指導部を中心に進路からの選択パターン（モデル）の作成を進める。</li> </ul>

## ■教科指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 4、5、6、生徒 1、保護者 1、2)

〈教務部〉

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習活動における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、一人ひとりの力を最大限に伸ばし、進路実現に繋げていくための指導方法の工夫・改善を図る。</li> <li>・幅広い視野や教養を身につけるため、主体的・意欲的に学習活動に取り組む態度を育成する。</li> <li>・家庭学習の習慣が身につく教科指導や、放課後・休業期間等を活用した教科指導を継続して行う。</li> <li>・各学科における検定等の取得、英語力の向上に向けて、きめ細やかな指導を充実させていく。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員対象項目である「生徒の実態に応じて、指導内容や指導方法を工夫してわかりやすい授業を行っている」は90%近くになっており、28年度にも増して教員側の自己評価は高い。(教職員5)。また、保護者の対象項目である「本校のカリキュラム(教科・科目構成)は、お子さんの進路実現に役だっていると思いますか」でも80%を超えており、一定の成果は上がっている。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の実態にあったきめ細かな指導をさらに進めるとともに、授業方法・授業内容の工夫と教科指導力の向上を図る必要がある。</li> <li>・生徒が達成感を得られるよう、細かな目標設定や生徒が取り組みやすい環境を提供するなどの工夫を行う必要がある。そのために、授業公開をさらに進め、研究授業や意見交換を行い、さらに生徒が主体的に学べる工夫をする必要がある。</li> <li>・検定試験の受験指導(補習を含む)や家庭学習の習慣化の推進、部活動生徒の学習時間の確保などが課題である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの職員が部活動の顧問を担当している現状にあるため、検定試験の受験指導等の時間確保が難しい現状にある。生徒の興味・関心・意欲の向上を目指したより一層の授業改善と創意工夫を図り、わかる授業を実践することにより、学習意欲及び学力の向上につなげていく必要がある。</li> <li>・勉強と部活動の両立を目指す生徒も多く、時間を浪費させないためにも生徒に対する学習方法のガイダンスを充実させ、見通しを持たせながら学習を進め、情報の共有、教科間連携の強化など、学校全体で学習環境を整え、学習する雰囲気をつくる必要がある。</li> <li>・家庭学習の習慣化を図るため、課題の提出(回収)方法、課題に対する評価等を工夫していきたい。</li> </ul>

〈国語科〉

取組	・商業科3年の「現代文B」を2クラス3分割の同時展開にしたことをはじめとして、きめ細かい指導を実践する環境を整えることに取り組んだ。
成果	・授業中、生徒一人ひとりに目が届くようになり、良好な成果が上がった。
課題	・少人数展開にできない科目もあり、生徒の学習活動が活発になる工夫がさらに必要である。
改善策	・生徒の学習への取り組み状況を、今以上に見取することに努め、その結果を出来るだけフィードバックする授業内容へと変えていく。

〈地歴公民科〉

取組	・商業科3年の「日本史A」を2クラス3分割の同時展開にしたことをはじめとして、「政治・経済」ではアクティブラーニング型の授業を実践するなど、きめ細かい指導を実践する環境を整えることに取り組んだ。
成果	・授業中、生徒一人ひとりに目が届くようになり、良好な成果が上がった。また、生徒の主体的な学習活動が行われるようになった。
課題	・少人数展開にできない科目もあり、生徒の学習活動が活発になる工夫がさらに必要である。
改善策	・生徒の学習への取り組みについて、一層細かく見ていくことに努め、その結果をフィードバックする授業内容へと変えていきたい。

〈数学科〉

取組	・主体的な学びを生徒が行えるような授業実践を図る。
成果	・課題を提出する生徒の割合が増え、授業の理解度が上がっているように感じている。
課題	・抽象的な教材を扱うときに、どうしても理解度や学習意欲が低下してしまうことが課題である。
改善策	・コンピュータを活用する。図形などでは、具体的な働きかけが生徒の理解度につながると考えている。

〈理科〉

取組	・29年度、理科室のディスプレイ効果の向上を行った。
成果	・移動教室に早めに来る、休憩時間に立ち寄るなど、興味・関心を持つきっかけを増やした。さらに、心の癒し空間としての機能を付加させた。

課 題	・生き物の展示に関して、趣旨が正確に伝わっていない場合がある。
改善策	・理科室のディスプレイに関して、ラベルを充実し、配置等も工夫をする。

### 〈保健体育科〉

取 組	・生徒が自らの健康に関する知識と理解を深め、生涯を通じて適切に管理し改善していく素養を育てられるように図る。
成 果	・生徒が運動に親しむことによる生涯スポーツへの理解と、健康的な生活の管理・改善への理解が深まるよう授業を進めた。
課 題	・生徒の運動経験・日常の運動量の二極化が指摘されている中で、より多くの生徒が運動と健康の大切さを理解し実践できるよう推し進める必要がある。
改善策	・継続的な授業改善により、体力・運動への親しみの向上と傷害にわたる健康的な生活の理解が深められるように指導することとする。

### 〈家庭科〉

取 組	・家庭基礎「食生活と栄養」と連動した栄養教育プログラムを取り入れた。
成 果	・家族パフォーマンスアップの食事メニューやビタミンを効率よく摂取するためのテクニック等、映像による具体性のある事例を参照することができた。最新の情報が得られた。
課 題	・実生活に取り入れることができる実習との関連が必要である。
改善策	・食生活から課題を見つけ、プログラムと連動した実習を工夫する。

### 〈芸術科〉

取 組	・多くの生徒が興味を持って取り組めるよう、実技課題の内容を工夫した。
成 果	・生徒たちが分かりやすく、また、興味を膨らまして授業に参加することができた。
課 題	・生徒の基本的な知識や技能が不足しているので、授業内容の精選、展開の更なる工夫が必要である。
改善策	・課題の設定などを今まで以上に工夫して授業に取り組みたい。

※外国語科は「国際学科」、商業科は「商業科」を参照。

## □特別活動・部活動の状況

(関連アンケート番号：教職員 7、8、生徒 2、3、保護者 3、4)

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会や各局（委員会）の活動に関しては、計画的、主体的に取り組めるように教員がサポートする。特に体育祭や文化祭等の行事は、クラスを主な単位として、全校生徒が積極的に参加できるよう、生徒会本部役員を中心に活動に取り組む。</li> <li>・部活動については、各顧問の指導のもと、生徒が主体的に活動できるようにする。</li> <li>・ボランティア活動など、地域との交流・連携を深める活動に、いろいろな場面で取り組んでいく。</li> </ul>
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会本部役員の引き継ぎも円滑に行われ、行事への計画的、積極的な取り組みがみられた。クラスとの連絡・調整も計画的に行う努力をし、スムーズに行った。</li> <li>・部活動については、運動部、文化部ともに、熱心に活動を続け、全国大会、関東大会の場でも入賞等の活躍ができた。</li> <li>・桜まつりや南まつり及びY校祭等でも地域との交流ができ、Y校祭では荒天での様々な変更にも関わらず、多くの来校者を迎え成功させることができた。</li> </ul>
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校行事では、生徒会行事計画と他の分掌や学科の行事の調整、LHR計画との調整が課題である。</li> <li>・部活動では、予算が十分に確保できないことと、部活動指導員が十分に配当できず、専門性の高い部活動の指導に困難が生じているなど課題があり検討する必要がある。</li> <li>・地域との交流で始めた、野外の地域ステージ（Y校祭）で、地域への協力のお願いや演奏時間等、参加者との連絡調整が課題である。またステージの老朽化による安全対策も徐々に考えて行く必要がある。</li> <li>・29年度はY校祭等のステージ発表の際の写真撮影の管理に努めたが、今後も検討を続け、学校全体で取り組む必要がある。</li> </ul>
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会の行事計画の中で、クラスのLHRの内容の計画を他の分掌や学科等と早い時期にきちんと調整する。</li> <li>・実態にあわせた部活動指導員の増員をお願いすると同時に、各部に不公平感のない予算等の援助を考える。</li> <li>・Y校祭の野外での地域ステージの内容の見直し、改善の計画について整理、検討する。</li> </ul>

## □生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9、生徒 4、5、9、保護者 3、5)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導の重点として</li> <li>①生徒が安全かつ安心して生活できる学校づくり</li> <li>②集団生活のルール・マナーが守れる生徒の育成</li> <li>③生活環境の整備・美化に努める生徒の育成</li> <li>④思いやりと感謝の心を持つ生徒の育成</li> <li>⑤自ら進んで挨拶ができる生徒の育成</li> </ul> <p>以上の5つの視点を目標とし、指導を行った。</p>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・85%以上の生徒が本校生徒であることに誇りを持っている。質問4、5では、不満を感じている生徒は二割程度となっている。保護者においても学校生活に80%以上の肯定的な意見をいただいている。教職員についてはおおむね良い評価を得ていると考えられる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より多くの肯定的な意見が増えるよう、できる範囲で生徒・保護者の意見に耳を傾け、指導に取り入れる必要がある。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全教職員の指導に対する共通理解を深めることを模索し、指導の徹底を図るようにする。</li> </ul>

## ■進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10、生徒 1、6、保護者 6)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1・2年生全体には企業との交流会を通して就職への理解を深めさせ、2年生の就職を希望する生徒に対しては職業人になる自覚を求める指導をする。また、3年生には毎週、社会に求められる人材となるようきめ細かな指導を行う。また、内定後も卒業時までの指導として、就職セミナーを5回実施する。</li> <li>・進路ガイダンス等の取り組みを単に増やすのではなく、指導の内容が生徒の問題意識やニーズときちんと合致しているか、指導のタイミングが合致しているかを検証し、効果的なガイダンスとなるべく企画運営する。特に3年間の経年変化に合わせた将来像づくりを促すガイダンスを行った。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早い段階での意識付けときめ細かい就職指導の結果、1社目で90%の生徒が採用内定を決め、最終的には希望する生徒全員が内定を受けた。</li> <li>・「あなたは進路説明会等で進路に関する情報を十分に理解できましたか」(生徒6)で「そう思う+ややそう思う」の全学年での数値が28年度の84%から81%に3ポイント減少した。しかし、3年については87%と高いポイントを示しており、経年変化を踏まえてガイダンス機能を充実させる取り組みの成果が上がったと考えられる。</li> </ul>

課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の企業は、イノベーション能力を備えた意欲ある人材を求めている。経営者と一緒になって企業の将来像を描ける人材の育成にさらに取り組み、1社目での内定率をさらに高められるよう、2年生の早い段階からキャリア教育を充実させる必要がある。また、3年生では、途中から民間を希望する生徒への短い期間での就職指導や同時間帯に活動できない生徒への工夫が課題である。</li> <li>・保護者6「希望進路に応じた情報の提供があり、適切な指導が行われていると思いますか」の「そう思う+ややそう思う」の数値が28年度の78%に対し79%と変化がない。生徒へのガイダンスの取り組みが見えにくい部分があるということだと考えられる。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の企業研究以外に、日々刻々と変化する現代企業の求める人材像も研究する。常日頃から就職指導に重点を置くとともに、1・2年生へのキャリアプランニングを大切にし、3年間を通しての進路指導体制をさらに整える。</li> <li>・29年度後半には、卒業生によるパネルディスカッション形式や、実習型の体験プログラムを導入し、新しいガイダンスを取り入れた。新しい試みを模索しつつ、生徒にとって効果的かといった検証を常に行うようにする。それにともない家庭へのお知らせや校内の報告を増やしていき、保護者会や保護者説明会、職員会議等の機会を活用する。また、入試改革を視野に入れて、生徒個々が取り組むキャリア教育体験を検討し、実施する。</li> </ul>

## □保健指導及び環境美化の状況

(関連アンケート番号：教職員 11、12、生徒 7、8、保護者 7、8)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康診断等の機会を利用し、自分の健康に関心を持ち生涯にわたって健康の保持増進に努めることができるよう意識づけを行った。</li> <li>・美化委員の清掃活動やごみの分別当番等で美化や環境に対する意識を高めた。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(生徒7・保護者7)の結果より、生徒においては8割弱の生徒が肯定的であったが保護者においては6割程度にとどまっている。その理由として高校生ということもあり生徒本人への働きかけに重きをおいているからであると思われる。</li> <li>・(生徒8・保護者8)概ね肯定的意見であった。毎日の清掃活動や環境整備・スポーツゴミ拾いなどのイベントで意識が高まっている結果だと思われる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者への働きかけの工夫が今後の課題である。</li> <li>・分別への意識は高まっているが、ごみの減量化への意識は低くその点が課題である。</li> </ul>



改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・30年度は健診結果を面談時に全家庭に戻すなどし、家庭でも生徒の健康状態に関心をもってもらえるような機会を提供するようにする。</li> <li>・文化祭では準備の段階から呼びかけを行い、ごみを減らす意識をもたせるようにする。</li> </ul>
-----	---

### 3 学校経営の状況

#### ■教育目標等の設定・実施状況

(関連アンケート番号：教職員 13、生徒 9、保護者 1)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの学科の教育目標に応じて担当する教職員が、生徒一人ひとりの個性を尊重し、ビジネス教育・国際理解教育・マネジメント能力の育成を図っている。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒及び保護者による学校評価において「本校の教育内容に対する満足度」や「本校生徒であることの誇りに思う」は高い評価が得られた。これは教職員が生徒一人ひとりに寄り添った学習指導、生活指導を行っているためと考えられる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の「学校教育目標の実現に向け全教職員が取り組んでいる」について実現できているという回答が75%と生徒及び保護者の意識より低くなっていることが課題である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学科によって異なる教育課程や行事が、本校の複雑さを増加させている要因となっている。他の学科の教育活動に対する理解や、行事への内容、事後の報告等を共有することにより学校全体の学校教育目標の理解を進める。</li> </ul>

#### □組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 14、15、16、17、18)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員が互いに研鑽し力量を高め合える環境を整え、意欲を持って業務に取り組めるように教職員が協力し、教育活動を計画的に進めている。また経験年数の少ない教職員の育成に教科を超えた協力体制づくりを進めている。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協力して円滑な学校運営ができるように教育活動を計画的に取り組んでいる。経験ある教職員が若手教職員の育成に非常に協力的である。これは教職員一人ひとりが課題意識をもって協力して学校運営に協力している成果であり、若手の育成についても教職員が非常に協力的なためである。</li> </ul>

課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>29年度の「各学年の運営は情報が共有されて組織的取組が円滑に行われているか」の教職員の回答結果が58%と低い。これは教職員の多忙により各クラスにおける課題が、管理職には報告がなされているが、学年の中では十分な報告時間がとれていない現状であるからだと考えられる。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年の会議の時間は限られているので、文書による記録と情報管理の厳格にし、学年情報の供覧システムを進める。指導経過を可視化させることで指導上の参考にすることができる。</li> </ul>

## □学校経理、施設・設備及び情報の管理状況

(関連アンケート番号：教職員 19、20、21、22、生徒 10、11、保護者 8、9)

取 組	<ul style="list-style-type: none"> <li>改修が必要になっている施設設備が年々増加している。限られた予算の範囲で生徒の安全を優先に順位づけをしながら施設改修を進めている。公金、準公金は「公金・準公金マニュアル」に沿って厳格に管理し、情報の管理については適切な取り扱いを遵守している。</li> </ul>
成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>「予算案の作成」、「公金・準公金の取り扱い」、「施設管理」、「個人情報管理」については、教職員による学校評価においていずれも高い評価が得られている。これは委員会、分掌等により学校全体として組織的かつ計画的に適切に立案、管理していること、そのために教職員の意識が向上していることが考えられる。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい時代に対応する商業教育の推進のために、Wi-Fi 環境の整備等が課題としてあげられる。また学校生活上の住環境として商業棟のトイレの改修等を進める必要がある。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校予算の計画的執行と同窓会、後援会等からの支援も含め方策を検討し、実現に取り組む。</li> </ul>

## ■保護者・地域等との連携協力状況

(関連アンケート番号：教職員 23、24、生徒 13、保護者 10)

取 組	<p>1 P T A活動との連携</p> <p>(1) 年3回発行されるP T A広報委員会による「P T Aだより」は学校の教育活動を保護者へ伝える媒体として貴重なものであるから、その内容の充実を図るための連携協力をする。</p> <p>(2) P T A成人委員会による「施設見学会」、その他の企画は保護者の学校理解のために有効なものであるから、協力、連携をする。</p> <p>(3) Y校祭でのP T Aの活動の場であるバザーや無料休憩所の企画運営に協力する。</p> <p>(4) Y校おやじの会による月1回の環境整備活動や教員との交流ソフトボール大会、南太田小学校と蒔田中学校のP T Aと連携しての大岡川沿いの清掃活動に参加、協力する。</p> <p>2 地域との連携</p> <p>(1) 「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて、地域との連携に引き続き取り組む。</p> <p>(2) Y校祭においては、生徒会の「地域交流局」の生徒の協力のもと、地域のステージ発表や南区スポーツ推進協議会による「さわやかスポーツ」を実施する。</p> <p>(3) 地域ボランティア「花づくりの会」により行われる、Y校庭園整備に協力する。</p> <p>(4) 南区のイベント（南まつり・桜まつり）へ参加する。</p> <p>(5) 地元南太田町の夏祭りでお神輿の担ぎ手として生徒が参加。</p> <p>(6) 地域清掃を各学期の大掃除及び生徒会の「美化委員会」による特別清掃活動として行う。</p> <p>(7) 国際学科の生徒による南太田小学校「英語教室」での交流を行う。</p> <p>(8) 商業科による「老人クラブ・パソコン教室」を行う。</p> <p>(9) スポーツマネジメント科が運営主体となる第4回「Y校カップスポーツG O M I 拾い大会」を行う。</p>
-----	--

成 果	<p>1 「P T A活動が十分保護者に理解され円滑に運営されている」（教職員 23 P T A活動）の高い評価に見られるように、P T A活動をはじめとする保護者の諸活動が、教職員との連携協力のもと活発に行われた。</p> <p>2 地域との連携 「学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」（教職員 24 地域連携）</p> <p>(1) 「わがまちの学校づくり推進会議」を通じて、地域との連携に引き続き取り組んだ。</p> <p>(2) 取組欄の(2)～(8)に対しては、多くの地域の方々の御協力、御参加のもと成功裡に行うことができた。</p>
課 題	<p>1 P T A活動の発信に際し、より一層「個人情報の取り扱い」に注意を払うこと。</p> <p>2 「横浜商業高校らしい地域連携活動」を、地域の方々にさらに理解して頂くことが課題である。</p>
改善策	<p>1 「個人情報の取り扱い」に万全を期すことを課題とし、特に「Y校 P T Aだより」の内容を含め編集方針などを再検討する。</p> <p>2 ホームページをさらに活用し、地域への情報発信を密にする。</p>

## □危機管理状況

(関連アンケート番号：教職員 25、26、生徒 12)

取 組	<ul style="list-style-type: none"> <li>「運動活動時における安全の手引」を用いた職員研修や「食物アレルギーへの対応」等、学校独自の生徒安全研修を進め、配慮が必要な生徒に対する職員の意識と対応力の向上に努めた。また不祥事防止研修等によるコンプライアンスの意識向上を進めた。</li> </ul>
成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修の成果により、生徒の安全に係る意識、事故発生時における行動に対する危機管理意識と対応力が向上している。これは研修による成果と実際に生徒が怪我をした際等の経験によるものである。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に対するアンケートにおける「災害時の避難経路を知っていますか」に対する回答「知っている」の割合が 63.8%と非常に低いことである。これは避難場所へのルートが決まっているものとの誤解あるからと考えられる。A E Dの使用方法は、最低2年に1回程度の研修が必要である。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒には避難訓練時に経路の確認を行い、教職員には様々な事例に対する安全対策に対する研修を行い教職員の知識や意識の向上に務める。特にA E Dの使用については近隣の連携先と協力し、毎年実施できるように計画を進める。</li> </ul>

## □学校に関する情報公開の状況

(関連アンケート番号：教職員 27、生徒 13、保護者 10)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校ホームページの運営</li> <li>・緊急連絡用メールの配信</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページは 28 年度と比べて更新頻度を高めた。(保護者 10)</li> <li>・緊急時メール配信については、毎月 1 回のテストメール送信を行った。(保護者 10)</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページについては、見たい内容が探しづらいため、わかりやすく、見やすい体裁の検討が必要である。</li> <li>・部活動情報に関して、各部活動からの積極的発信が必要である。</li> <li>・警報発令時には、緊急メールを送るなど必要な情報を積極的に発信していく必要がある。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校をあげての緊急時情報発信内容についての検討をする。</li> <li>・学校案内とホームページの内容の相互確認をする(矛盾がないか、重複していないか)。</li> <li>・各部活動顧問に、積極的な情報発信の呼びかけを行っていく。</li> </ul>

## 4 いじめへの対応に関する項目

### □いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5、保護者 3)

取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いじめ基本方針」の改訂</li> <li>・いじめ防止対策委員会定例化</li> <li>・「いじめ」の防止、早期発見及び措置</li> <li>・研修会の実施</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取り組みに対して、教職員は 84%、保護者は 85%の肯定的な評価を得ることができた。各学年によるいじめ対策の取り組みが評価され、いじめ対応の意識が高まったと考えられる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いじめや差別を許さない環境づくりに努めていますか」の問いに対し、そうは思わないと答えた生徒が 41 名(クラス平均約 2 名)いるので、この数字が 0 人になるような取り組みが求められる。今後、いじめ問題で、生徒が自ら、行動できるような意識改革が必要であると考ええる。また、各学年での、いじめ対策の取り組みを実践していくことも必要であると考ええる。</li> </ul>
改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス担任を中心として、生徒個々の活動を注意深く見守り、学年会で生徒の情報交換を通して、いじめ防止対策委員会を中心に組織的に対応するよう取り組むこととする。</li> </ul>